

※3章 15～18節の総論

●2章 15節にある「人は律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められる」という提題の第三の論証が3章 15～18節に述べられています。ここでの要点は「アブラハムとの**契約**、その恵みによる**相続**は、律法によるのではなく、**神の約束**によってなされる」ということです。信仰が約束に変わっています。というのも、信仰は神の約束に基づいているからです。パウロはその約束が不変であることを論証しようとしているのです。

3章 15節

Ἀδελφοί, κατὰ ἄνθρωπον λέγω:

ὁμως ἀνθρώπου κεκυρωμένην διαθήκην οὐδεὶς ἀθετεῖ ἢ ἐπιδιατάσσεται.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 3章 15節

兄弟たちよ、人間の例で説明しましょう。人間の契約でも、いったん結ばれたら、だれもそれを無効にしたり、それにつけ加えたりはしません。

●ここでパウロは珍しく「人間の例」を持ち出しています。「人間の例」と訳された語彙は「人間に従って、人間のやり方に従って」を意味する「カタ・アンスローポン」(κατὰ ἄνθρωπον)の二語で、新共同訳は「わかりやすく」、聖書協会共同訳は「人間を例にとって」、新改訳改定第三版は「人間の場合にたとえて」、口語訳「世のならわしを例にとって」、佐竹訳「人間的な仕方で」、山岸訳「人間社会の原理で」などと訳しています。

●神の真理は決して「世のならわしに」よって、「人間社会の原理」によって証明されるわけではありません。しかしパウロは、ここで一般の人々によって経験され認められていることが、神の真理によって裏打ちされていることを示すために「カタ・アンスローポン」を使ったようです。ちなみに、この表現はこの箇所だけです。

●「契約」(「ディアセーケー」 διαθήκη)とあります。新改訳改定第三版と新共同訳では「遺言」と訳していましたが、その改訂版である【新改訳 2017】【聖書協会共同訳】では、いずれも「契約」に改訳されています。その改訳の理由はわかりません。「人間の契約でも、いったん結ばれたら、だれもそれを無効にしたり、それにつけ加えたりはしません」とあるように、なおさら、神との契約ならば、それを反故にすることは決してできないという「契約の不変性」をパウロは強調しようとしています。これは 17節の伏線になっています。

3章 16節

τῷ δὲ Ἀβραὰμ ἐρρέθησαν αἱ ἐπαγγελίαι καὶ τῷ σπέρματι αὐτοῦ. οὐ λέγει,
Καὶ τοῖς σπέρμασιν, ὡς ἐπὶ πολλῶν, ἀλλ' ὡς ἐφ' ἑνός, Καὶ τῷ σπέρματί σου,
ὅς ἐστιν Χριστός.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 3 章 16 節

約束は、アブラハムとその子孫に告げられました。神は、「子孫たちに」と言って多数を指すことなく、一人を指して「あなたの子孫に」と言っておられます。それはキリストのことです。

●冒頭に接続詞「デ」(δέ)があります。「さて、ところで」の意味。

●15 節の「契約」(「ディアセーケー」 διαθήκη)が、16 節では「約束」(「エパングリア」 ἐπαγγελία)という語彙に変わっています。「ところで、**数々の約束**(「エパングリア」 ἐπαγγελία の複数)が、**アブラハムとその子孫に告げられました**(「告げられました」は「言う、語る」を意味する「レゴ」 λέγω の 3 人称複数アオリスト受動)」とあります。ここでは多くの人々を指すかのような「子孫たちに」とは言ってはいません。かえって(むしろ)、一人の人を指しているかのように、こう言っています。「**そして、あなたの子孫に**」(「カイ・トゥー・スペルマティ・スー」 Καὶ τῷ σπέρματί σου)。「**その方とは、キリストです**」(「ホス・エスティン・クリストス」 ὅς ἐστιν Χριστός)とあります。

【新改訳 2017】創世記 15 章 5~6 節

5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「**あなたの子孫は、このようになる。**」

6 アブラムは【主】を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

●この箇所だけを読むなら、「あなたの子孫は、このようになる」とは、「あなたの子孫」(「ザルエハー」 צרעה)の数が星の数ほどになるという意味で言われています。ヘブル語の「子孫」(「ゼラ」 זרע)という語彙は集合名詞ですから、常に単数形で用いられます。ところが、パウロはこの単数形を「キリスト」に当てはめているのです。

●アブラハムになされた**数々の約束**とは何でしょうか。

【新改訳 2017】創世記 12 章 7 節

【主】はアブラムに現れて言われた。「わたしは、**あなたの子孫**(צרעה)にこの地を与える。」アブラムは、自分に現れてくださった【主】のために、そこに祭壇を築いた。

【新改訳 2017】創世記 13 章 15 節

わたしは、あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そして**あなたの子孫**(צרעה)に永久に与えるからだ。

【新改訳 2017】創世記 17 章 7 節

わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、また**あなたの子孫(꠆ꠕꠗ꠆)**との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、**あなたの子孫(꠆ꠕꠗ꠆)**の神となる。

【新改訳 2017】創世記 22 章 18 節

あなたの子孫(꠆ꠕꠗ꠆)によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。

【新改訳 2017】創世記 24 章 7 節

天の神、【主】は、私の父の家、私の親族の地から私を連れ出し、私に約束して、『**あなたの子孫(꠆ꠕꠗ꠆)**にこの地を与える』と誓われた。その方が、あなたの前に御使いを遣わされるのだ。あなたは、そこから私の息子に妻を迎えなさい。

●以上の聖句にある「**あなたの子孫**」はすべて単数形の「ザルアハー」(꠆ꠕꠗ꠆)です。子孫(「スペルマ」σπέρμα)は、本来、集合名詞としての「子孫」の意味ですが、これをなぜパウロはキリストのことを表していると解釈しているのでしょうか。それは、アブラハムに対する約束はイエシュア・メシアにおいて成就しているからです。メシアなるイエシュアはイスラエルの民の歴史を踏み直した方であり、アブラハムの子孫であるイスラエルも、あるいは教会も、キリストに対する信仰によって、はじめて数々の約束と祝福を受けるからです。アブラハムに対する約束は、イエシュア・メシアにおける約束の予型だからなのです。それゆえ、地のすべての国々は、イエシュア・メシアに対する信仰によって、アブラハムの子孫と言えるのです。

●ちなみに、神はアブラハムと契約を結んだのは七回(すべて創世記)です。そのひとつひとつを、聖書を開いて確認してみましょう。そしてアブラハム契約にある数々の約束とクリスチャンに約束されているものを比べてみましょう。

①創世記 12 章 1～3 節

②12 章 7 節

③13 章 15～18 節

④15 章 2～21 節

⑤17 章 1～14 節

⑥18 章 10 節

⑦22 章 15～18 節

●神がアブラハムと結んだ契約は、イサク(創世記 26:3, 24)とヤコブ(創世記 28:13～15、35:12)にも繰り返されます。それはアブラハムの子孫ばかりではなく、地のすべての民にまで効力を及ぼす契約だったのです(詩篇 105:8～11、ガラテヤ 3:7～9、29)。

- ローマ人への手紙 4 章 21～25 節にアブラハムのことのことが次のように記されています。

【新改訳 2017】

- 21 神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。
- 22 だからこそ、「彼には、それが義と認められた」のです。
- 23 しかし、「彼には、それが義と認められた」と書かれたのは、ただ彼のためだけでなく、
- 24 私たちのためでもあります。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。
- 25 主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。

- アブラムが義と認められたのは、「ただ彼のためだけでなく、また私たちのため」とあります。ここで「私たち」とは、イエシュアをメシアと信じるユダヤ人と異邦人クリスチャンを含む「教会」のことです。

3 章 17 節

τοῦτο δὲ λέγω: διαθήκην προκεκυρωμένην ὑπὸ τοῦ θεοῦ ὁ μετὰ τετρακόσια καὶ τριάκοντα ἔτη γεγωνῶς νόμος οὐκ ἀκυροῖ, εἰς τὸ καταργῆσαι τὴν ἐπαγγελίαν.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 3 章 17 節

私の言おうとしていることは、こうです。先に神によって結ばれた契約を、その後四百三
十年たってできた律法が無効にし、その約束を破棄することはありません。

- 15 節でパウロが言わんとしていることが、再度、主張されます。「先に神によって結ばれた契約」とは、神がアブラハムに対して約束された契約です。その契約が「四百三十年たってできた律法」によって無効にされることは決してないと主張しています。つまり、「四百三十年たってできた律法」とは「モーセの律法」(シナイ契約)のことです。この契約は神が仰せられた戒めのすべてを守り行うならば、神は彼ら(イスラエル)の神となり、彼らは神の民とされるという条件付きの契約です。もし、彼らが戒めを守ることができなければ、彼らはのろわれ、さばかれてしまうという契約です。

- ちなみに、「四百三十年」という年数は、以下のように、イスラエルのエジプト滞在の期間(出エジプト 12:40～41)となっています。

【新改訳 2017】出エジプト記 12 章 40～41 節

- 40 イスラエルの子らがエジプトに滞在していた期間は、四百三十年であった。
- 41 四百三十年が終わった、ちょうどその日に、【主】の全軍団がエジプトの地を出た。

3章 18節

εἰ γὰρ ἐκ νόμου ἡ κληρονομία, οὐκέτι ἐξ ἐπαγγελίας:
τῷ δὲ Ἀβραὰμ δι' ἐπαγγελίας κεχάρισται ὁ θεός.

【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 3章 18節

相続がもし律法によるなら、もはやそれは約束によるものではありません。しかし、神は約束を通して、アブラハムに相続の恵みを下さったのです。

●18節にガラテヤ書で初めて「相続」という語彙が出てきます(「相続財産」とも訳されます。祝福の約束の成就を意味します)。これはヘブル語の「ナハラー」(נָחַר)のギリシア語訳です。エペソ書では1章14節、1章18節、5章5節では「御国」との関連で使われています。「相続」と訳された「クレーロノミア」(κληρονομία)はガラテヤ書ではここ1回限りですが、3章29節、4章1, 7, 30節、5章21節では「相続人」(「クレーロノモス」κληρονόμος)で使われています。織田昭編「新約聖書ギリシア語小辞典」によれば、聖書中での「クレーロノミア」の意味の重点は、「神が私に与えたもの、また私に約束したものが『わが所有』であることの絶対的確かさ」という点にあると説明されています。キリストにあって、私たちに約束されていることは、「御国を受け継ぐ者とされること」、御国の「相続人とされること」、「相続人に定められること」「特権を与えられること」です。これらは律法によって与えられるのではなく、約束によるものであるということです。

●神は御国の相続の祝福を無条件で与えるという約束をしているのであって、その資格を私たちの努力で得ようとする者には決してお与えになりません。自分にはその資格がないことを、神の一方的な恵みによって与えられるものだということを信じる者に与えられるのです。つまり、約束は信仰によって受け取るということ、パウロはここで「**相続の恵みを下さった**」としています。この動詞は「好意を示す」という意味の「カリゾマイ」(χαρίζομαι)の完了形中態3人称単数です。完了形は今もなお続いていることを示す時制です。つまり、「相続の恵みをくださった(与えられた)」のはアブラハムだけでなく、「私たちが信仰によって約束の御霊を受けるため」(3:14)に、今もなお有効だと言っているのです。